

不登校児童の事例研究

—学校にいかないで、自分さがしの心の旅をするA子—

土岐市立鶴里小学校 斎木 孝明
学校教育講座(心理学) 宮本 正一

An Approach to Persistent Non-Attendance : A Girl Who gropes Her Way Toward an Understanding of Her Problems

TAKAAKI SAIKI

Tsurusato elementary school, Tsurusato-cho, Toki-city, Gifu, 509-51 JAPAN

MASAKAZU MIYAMOTO

Department of Psychology, Faculty of Education, Gifu University, Yanagido, Gifu 501-11 JAPAN

I はじめに

平成6年度に実施された学校基本調査によるところ、小学生で「学校嫌い」を理由として長期欠席している者は、全国レベルで千人あたり1.42人、県レベルでは1.79人の率であり、これはいずれも過去最高を記録した昨年度を上回っていることから、不登校の問題は依然として大きな問題であるといえる。必然的に、このような不登校児にアプローチしようとした研究や不登校児にかかわった文献は年々増えている。小泉(1973)が提唱したタイプ分けは、より適切な対処のあり方を求めていくのに効果を上げ、小泉(1975)ではそれを具体的な事例で紹介している。東山(1984)、金子(1992)、神保(1984)は、相談機関だけでなく、家庭や学校でもやり方によっては不登校児に対して適切な対応ができる教えている。また、以前は要因を本人・家庭に求める研究が報告されることが多かったが、近年は学校要因も無視できないものとされ、学校での対応のあり方、予防のあり方などに目を向けた報告も数多く、高階(1995)、稲村ら(1991)、中井(1992,1994)、村田(1988)によって報告されている。より学校現場に近い研究では、岐阜県教育センター協会(1980)、石田(1990)、

函館市南北海道教育センター(1984,1992)、があり、詳細な事例の分析や興味ある意識調査の分析がなされている。また、学校での相談活動のあり方に示唆的な文献としては、石川・青木(1986)、国分・米村(1976)、氏原ら(1991)、文部省生徒指導資料第18集(1983)、文部省小学校生徒指導資料7(1991)、月刊生徒指導編集部(1989)がある。稲村(1994)、星野・熊代(1990)は、これまでの研究を展望し、今後の方向を求めるようしている。一方、学校の状況自体が不登校児を生む原因であるという論を強く進めているものには、登校拒否を考える会(1987)、渡辺(1992)、石川ら(1993)があり、同様な立場でこれを不登校児の側から記した文献に鈴木ら(1984)、石川ら(1993)がある。

このような研究や示唆を踏まえながら、本研究は学校現場の立場から不登校児についての事例を報告するものである。この事例は、当時、定期、または回復期の初期の段階にあったと思われ、まだ終結はしていなかった。筆者の斎木は、学校の相談係としての立場にあり、これまで担任の支援をしながら外部機関と連携し、対応をしてきた。また筆者の宮本は本事例の不登校児に面接をし、指導のあり方を検討してきた。再登校が可能かどうかは、本人の成長を見

守り、状態像を的確に把握しながら、本人及び家族への支援が適切に行えるかどうかにかかっていると思っている。

II 事例の概要

1 A子について（不登校状態になるまでの学校での状況）

A子は11歳になる女児である。不登校状態に陥ったのは、5年生1月中旬からである。低学年の頃は、学校に来ると楽しく、満足そうであったが、登校直前に体の不調を訴えることがたびたびあった。また、中学年になると、朝、早く起きることができず、学校でよく保健室に行きたがったが、友だちの誘いで乗り越えようと努力していた。この時期を過ぎると精神的に安定し、様々な活動を通して自分を高めようと努力する姿が見られるようになった。高学年になってからは、後述するとおりである。

欠席の日数は以下の通りである。

1年生	6／243	4年生	5／231
2年生	1／245	5年生	67／243
3年生	3／240	6年生	141／155

2 不登校状態が始まったきっかけ

1月中旬、気分が悪いため、登校時に母親に車で学校まで送ってもらう。しかし、忘れ物をしたことに気づき、家に引き返す。その際、家の中で食べたものを全部もどしてしまい、欠席することになる。以後、しばらくは風邪による欠席の扱いであったが、これをきっかけに、長期欠席状態になった。

- 3 家族 父 : 建築業、物静か。
 母 : 内職、多弁。
 叔父 : 父親の弟。独身。
 兄 : 中学2年生、やや短気。
 父方祖父 : X年10月、病死。
 父方祖母 : X年5月、病死。

家族構成 X年10月10日～



III 経過と学校の対応

第1期 身体症状を呈し混乱した時期

#1 X年 1月17日

A子の母から「風邪」という連絡が学校にあり、欠席。放課後、担任は、A子の状態を心配して電話。家庭訪問。A子は、「風邪をひいているので行けない。しばらく治りそうもない。もし、風邪が治ったら行く。」と言う。しかし、母親の話から、次のような詳しい様子を聞くことができた。「今日、体の調子が悪いからということで、A子を車で学校へ送って家を出た後、忘れ物をしたと言うので一旦家に戻ったが、とりに行った後、一向に家から出てこないので様子を見に家に入ったところ、食べた物を全部吐いてしまい、蒼い顔でうずくまっていた。体の状態としては、微熱があり上がり下がったりすることもある。病院では尿、血液検査をした。」電話でのやりとりと、その日のうちの家庭訪問で、担任は、A子は風邪の可能性も大きいが学校へ行くのを体が拒否しているのではないか（登校拒否の症状）とも感じた。またそれは、近々行われるマラソン大会を嫌がっているので、それが理由かもしれないとも話していた。A子は、長距離走が苦手で、始業前の全校マラソンにも消極的であったからである。登校拒否の可能性を考えたのは、担任が登校拒否児が早期段階に示す特徴的な症状を、校内教育相談の研修から学んでいて理解していたことによ

る。このA子の状態と担任の所見は、即日校長に報告された。

2 X年 1月18日

母親からの欠席の連絡を担任が受ける。内容は、「朝、起きたら気分が悪いということ」「学校へ行きたくないといっていること」であった。この母親からの連絡の内容から、A子に対する学校としての対応を始める必要性が高まることになる。

このころ相談係は、他の担任とチームを組んで別の登校拒否のケースにかかわっていた。このため、A子については生徒指導主事とA子の担任がチームを組み、校長がアドバイス役をつとめる態勢をとった。相談係は、教育相談委員会にてのかかわりが主になる。

学級内のトラブルや本人が嫌がる何かの状況があれば、早期にその障害を取り除くような相談活動や学級指導を行い、また、A子の適応を図る必要がある。そうでなければ、A子の心理的な何かに原因を求める登校拒否の可能性が高まる。担任には、A子の理解と状態像の把握を継続的に行ってもらうことにした。しかし、マラソン大会が終了すれば、登校し始めるという楽観的な予測があったことも事実である。

3 X年 1月19日

欠席した。夕方、担任が本人に電話をいれる。そこで、A子が話したことは、友達など、学校生活についていやだと思うことは何もなく、クラスの子や担任に不満はないこと、一人で学校から帰るのがとても恐いこと、5年生の合宿訓練が近づいているが、母親と離れるのがいやなこと、お腹が痛いので、合宿に行っても泊まらずに家に帰りたいことなどである。また、担任が母親にA子の様子を聞いたところ、母親と一緒に寝たがったり、入浴も一緒にしたがるという。この後、教育相談委員会を開催し、これまでの本人の状態をもとに対応を練る。その結果、以下の4つの方針を確認した。

ア 本人が受け入れてくれれば、担任による家庭訪問を実施し、ふれあいを深めるようにする。そして、もし登校するなら、A子の心身

の状態を十分に考慮し、決して無理のないようにすることを伝える。同時に母親との連携を密にする。

イ A子の状態像は継続的に把握していく。
ウ あらためて学級内にA子にふりかかっていた問題状況はなかったか、もう一步踏み込んだ把握をするようにする。

エ 今後のA子の状態を、今しばらく見守りながら、他機関との連携をするかどうかについての判断をするようとする。もし紹介するならば、身体症状があることから、登校拒否児の対応について見識のある小児科を紹介することにした。

4 X年1月26日

この日、母子で病院へ行く。これまで暇を見つけて家庭訪問していた担任が母親やA子から聞いた話と、この日訪問した生徒指導主事が母親から聞いた話の中で、A子が朝起きられないこと、学校で実施していた食事記録を気にしていること（A子は、やや肥満気味）、学校へ行きたくないと言っていること、死にたいともらすこと、担任をいやがることはないこと、この頃ビデオを見て過ごすことが多いということが分かった。担任や生徒指導主事と本人が話すときには、よくしゃべり、目線をそらすようにして、盛んに咳をしていたということである。本人の心の中には、追いつめられたような状況になっている何かがあるような印象を受ける。

5 X年1月28日

前日の家庭訪問で、担任が、「今日校内マラソン大会があるので、よかつたら見学に来てみてはどうか」と誘う。登校は無理ではないかという予想に反し、A子は母親と一緒に登校した。そしてマラソン大会を見学した。表情は明るい。しかし、本人は風邪をひいていることは強調していた。このときは、やはりマラソン大会がネックになっていたかと思わせた。この様子なら月曜からは段階的に登校できるのではないかとも思われたが、翌日父親に遊園地へ連れていくってもらうとの交換条件で登校してきたことがわかる。

6 X年1月30日

これまでの経過や、病院での面接の内容、30日の欠席を受け、教育相談員会にて、次のこととを方針として出した。基本は、母親との関係改善がA子と母親に必要という医師の判断を参考にそれに沿うような手立てを考えることにする。
 ①登校刺激を与えない。登校しなければならないという緊張感から解放する。
 ②A子が夢中になって取り組めることが見つかれば、認め、見守る。無為な状態であっても責めないで受けとめる。
 ③担任は引き続き家庭訪問をする。会えなければ無理して会わなくてよい。そのときA子の気持ちを受けとめることを心掛ける。

7 X年1月31日

母と病院へいった。

8 X年2月 3日

これまで一週間の本人の様子が担任から次のように報告される。「自宅への来客に会いたがらない。担任が「学校へ行きたいか」と訊ねたところ、『行きたいとは思わない。』と言っている。」この日の放課後、生徒指導主事が訪問すると、A子はパジャマ姿のままである。生徒指導主事が「何で学校へこれんのかな。」と訊ねると、A子は、「かぜが治ったら行く。今は病院の薬を飲んでいる。のどがかわく。」などと言う。日中遅く起きて、テレビを見たりビデオを見たりするなどし、昼夜逆転の生活をおくっている。

9 X年2月18日～23日

担任の家庭訪問および電話のやりとりで分かったA子の状態は、咳があまり出なくなってきたこと、喉の痛みがとれてきたこと、そして腹痛は時々あることなどである。担任は、この週の金曜日に、A子の好きなお菓子作りを生かした学級活動をすることにした。この期間、A子は夜になると台所でケーキを焼いたり、クッキーを焼いたりすることに興味を持ち始めていたからである。学級活動が金曜日なので、その日にA子は登校したいと希望している。A子が先生になり、クラスの子に作り方を教えようというのである。

このころ家庭で問題が持ち上がった。一つは、

中一のA子の兄の起床が遅くなり始め、遅刻寸前に登校するようになったこと、二つ目は、A子が遅くまで起きているので、母親が夜眠るのが遅くなり、寝不足が重なって体の不調を訴えるようになったことである。中学校には、A子のことを伝え、兄への支援をお願いし、母親には、夜A子とつきあわなくても大丈夫だろうから、以前のような時間に床についてもらうようにした。

母親の問題は順に解消していったが、兄についてはまだくすぶるものが残ったようだ。A子は、料理に興味を持つのに加えて、ぬいぐるみの製作にも凝りだした。また、担任が「夜、クラスの活動写真を見に来ないか」と誘うと、母親と一緒に来校し、教室で写真を見ていった。時間をずらした登校を担任が提案したが、「無理だ」と本人が言う。

10 X年2月27日～3月 4日

依然、昼夜逆転の生活である。夕食後から深夜にかけて菓子作り。片づけは全くしない。朝になり、母親が洗い物の山を片づけることになる。昼間は、祖母から学んだ毛糸の編み物をするようになる。お手伝いも、言われたらするようになった。また、これまで母親と一緒に風呂に入っていたが、それがなくなり一人で入れるようになる。学級活動の菓子作りは楽しみにしているが、本人の希望で実施日が後にずれる。卒業式にも出たいと言う。この頃、A子がなぜ長期に欠席するのかについて他の児童から不信の声が聞こえるようになる。クラスの子には風邪がひどくて長くかかっていると伝えてある。A子の体の調子について担任が話し、子どもの理解を得る努力をした。

11 X年3月 6日～12日

昼夜逆転の生活である。3月15日のおやつ(クレープ、焼きリンゴ)づくりの参加に関心を示す。

12 X年3月13日～18日

15日朝、担任が始業前A子を自宅に迎えに行くが、寝ていて目が覚めず、起きられない。9時まで待ったが結局起きられなかったので、

担任はA子の学級活動参加を断念する。後日担任が家庭訪問したが、「先生に会いたくない。電話にも出たくない。」と言い、トイレに入り込む。面会の拒否は1日だけで、その後は再び教師と会えるようになる。病院にて心理テストを受ける。結果は4月に分かるということ。

13 X年3月24日

卒業式を欠席する。

14 X年3月25日

修了式を欠席する。

担任と教務で家庭訪問をする。担任の異動と生徒指導主事の退職を報告し、4月には新担任と教務が訪問する旨を伝える。教務は初めての訪問である。母親は、何とか6年生は初めからみんなと一緒にスタートさせたい希望を話す。本人の状態がよくなれば、本人の意向に添いながら、できるだけの協力を惜しまないことを伝える。

第2期 自分の殻から少し出てきた時期

15 X年 4月 6日～7日

相談係（教務）は、新担任と一緒に家庭訪問する。相談係が新担任を紹介し、あいさつをした。相談係は、新担任がスムーズに親子と話ができるようにリレーションづくりをする。しばらくすると、A子が新担任と話せるようになったので相談係は母親と話をする。仲の良い友だちが2名いてよく遊ぶという。A子はよくしゃべり、菓子作りのこと、ぬいぐるみのこと、犬のことなど次々と話題を変えながら話す。体調がよくなってきたとも言っていた。この後、1週間に1回のペースで担任が家庭訪問する。

16 X年 4月10日～15日

母子そろって病院へ行き、心理テストの結果を聞く。結果は、父母の了解をとり、4月19日に担任と相談係も知るところとなる。起床がやや早くなる。

17 X年 4月19日

両親の承諾を得て、担任と相談係が病院へ出向き、医師と面会する。面接と心理テストの結

果から、医師は次のように親と子についての見解を示す。

「母親は、精神的な疲れがあり、子どもを受け入れる状態ではなかった。そのため、子どもが甘えるのを自分から受け入れることができず、拒否的になる。A子は、母に甘えるのに抵抗を持っているから、母に真から甘えるということができない。親が学校へ行かせたいという気持ちがふっきれ、じっくり親子の関係を築けたとき、自分から社会（学校）へ出るようになる。短くて数カ月、そうでなければ1、2年はかかる。本人には、今は学校よりも親が必要である。」

学校側の「学校のできることは？」の質問に医師は次のように述べる。

「本人がどれくらい熟してきたかで登校刺激を与えることもあり得る。担任拒否がなければ、働きかけはしてもよい。見かけ上明るく振る舞っても、心の中では拒否的かもしれない。担任が帰った後、どんな様子が見られるのか、状態を知っておく必要はある。この時期学校ができることは、この子は今は家にいた方が安心だということを理解すること。家庭訪問するなら、一緒に遊ぶこと。親への対応としては、親の気持ちを受けとめるようにしてほしい。」

以上のことから、医師を訪問することによって得られた内容である。

18 X年4月20日～5月10日

A子は医師に、「あなたは今学校へ行くことができない状態である」と言われたことで、徐々に安心感が生まれたようだ。しかし母親は、「学校へ行かなくともよい」ことを伝えられてから、この子はこの先ずっと学校へ行かなくなるのではないかという不安を持ってしまう。

この胸の内を相談係に明かされたので、相談係は、話を聞き込んで母親の気持ちを受けとめた上で、学校としてもできるだけのことをする旨を伝えた。

19 X年5月1日

祖母が死去した。連絡をかねて母親と一緒に

A子が来校した。A子の落ち込みはひどかった。

20 X年 6月7日, 8日

修学旅行に参加し、楽しく過ごせる。

21 X年 6月19日

3校時頃、母親と学校に来校し校長室で面談する。校長の「興味のある図書を借りに来てはどうか」という発案を受け入れて、図書を借りに来る。校長、担任と校長室にて話をする。

22 X年 6月26日

3校時頃、母親と来校し、図書の返却をする。一人で図書館へ行き、校長室にて担任と話ををする。教室へも入り、修学旅行の写真を見ることができた。

23 X年 6月28日

A子の方から母に登校を催促する。4校時頃、母親と来校した。一睡もせず、徹夜をして来校したことである。夜中起きているので、朝方に寝てしまうと昼間起きられなくて、学校へ来られないためだと言う。手作り菓子を持参し、クラスの子と担任に渡す。体育の授業に参加できる。水泳終了後、友だちに勧められて教室で給食を食べることができた。

後日の母親からの話の中で、A子が「水泳をするためだけに登校すると、まわりの子がどんな目で見るのが不安だ」と訴えていることがわかる。

24 X年 6月29日

母親が医師と面接した。これまでの経過を話し、医師からこれまでの対応の仕方でこれからも進めるよう指示を受ける。

25 X年 7月5日

A子が自身の意向で来校を予定していたが、登校できなかった。昼夜逆転の生活が続いているためである。

26 X年 7月7日

A子が自身の意向で来校を予定していたが、登校できず。この日も昼夜逆転の生活が続いているためである。

27 X年 7月11日

母に登校を催促し、4校時頃母親と来校する。図書の返却をし、その後、校長室で話す。明日

は、給食を教室で食べるとのこと。

28 X年 7月12日

この日も母に登校を催促し、4校時頃母親と来校する。給食を教室で食べる。5校時、体育(水泳)に参加した。昼休みに、5年生の中に本人を見て「なぜあの子だけ特別なのか。」と非難する児童がいた。6年生の一部の男子である。相談係がそれに抗議をしに5年教室へいく。相談係は5年生の担任にも指導を要請した。

29 X年 7月15日

A子が母に登校を催促し、2校時頃来校する。図書の返却をし帰ろうとするが、家庭科の調理実習があり、担任に勧められて、授業に參加した。続く3校時には分団会へも參加した。ここでは積極的に司会までもする。この間、相談係は母親と面接する。母親は心労が多いことなど、今の自分の苦しみを涙ながらに語る。また、「A子さえ学校に行けば……。」と言う。相談係は、母親の話がとぎれるまで聞き込んだ。その後、7月17日に来校することを告げ、A子と帰宅した。

30 X年 7月17日

来校せず。

31 X年 7月20日

母に登校を催促し、A子が母親と来校する。夏休みのことについて、担任が対応する。A子と母親、A子と父親のふれあいが持ちやすいので、A子と共に楽しくできることを見つけて下さるようお願いする。その際、母親は、父親がA子の対応に積極的でないことへの不満、兄のA子への不適切な対応への不満を語る。

これに対して、父親との話し合いを家で持ってもらい、A子のためにどうしたらいいかという視点で、夫婦の協力をしてもらうよう働きかける。また兄の件は、父親からの働きかけで事態を好転させてみてはどうかと提案する。学校としては、父との相談日を設け、夫婦一致した行動がとれるように支援することにする。

第3期 足踏みの時期

32 X年 7月21日～8月31日

A子は、分団での学習会に参加し、中学生に算数で分からないことを聞く。よく分からぬでいるA子を見て、小3児「学校へ行ってないから分からぬのだ」と言う。小3児、帰宅後、言い過ぎたことを謝る電話をA子宅に入れたがA子はそれ以後学校に関したことに関心が薄れる。

学校での6年生キャンプに参加。しかし、夜半になり体の不調を訴え、帰宅する。

友だちと九州旅行の計画を練るために元気よく家を出発しT駅まで行く。バスに乗る段になり泣き出してしまって家に引き返す。

母親が8月2日に病院へ行く。

33 X年 9月1日

始業式を欠席する。

34 X年 9月18日

筆者の宮本と相談係がA子宅へ家庭訪問する。宮本が面接する。自分の現在の状況についての質問には応答するが、その内容はどこか本質を回避しがちで、そこには自分は触れたくない、あるいは面接者に触れられたくないという心理力動が働くようであった。また、宮本の質問に対してのA子の返答から、母親などから言われて学校へ行かなければならぬとは思っているが、A子自身はそれほど真剣に考えているという感じはなさそうに見受けられた。

この面接で分かったことは、現在A子は自分の趣味に没頭し、自分が安定してきてること、まだ学校は意識されていないこと。登校することについて、拒絶する感情、回避する行動もないかわりに、何とか登校しようという気持ちも少ないとある。

35 X年 9月26日

相談係が家庭訪問をする。本人と話したかったが、母親との話が中心になる。母親は、祖父の看病で手一杯で、A子のことをかまっている暇がないこと、そのため焦ってはいけないと思っていても、A子さえ学校へ行ってくれていれば

ずいぶん楽になると思ってしまうことなどを話す。A子は、特に相談係と話したがる様子はないようである。

36 X年 9月29日

校長と担任が父親と学校にて面接をする。父親の気持ちを受けとめる。父親は父親で、一生懸命A子のことを心配し、考えている。母親の苦労も重々承知している。両親が協力してA子にかかる努力をしたいと語られるのでそれを支持する。父親もA子に、犬の散歩や一緒に遊ぶことなどを勧めてみると言った。

37 X年10月2日

相談係が家庭訪問をし、A子と話をする。A子は最近譲り受けたインコのこと、犬が好きで犬のジグゾーパズルを組んだこと、制作中のぬいぐるみのことによどみなく一方的にしゃべる。

A子のおしゃべりが一段落したところで、風景画を描いてくれるよう依頼した。快く引き受けてくれる。そのとき、近所の同級生Y子が、いつものように「学級のたより」を届けに来る。現実に学校で起きていることについて触れた「たより」について、A子がどう思うのか知りたくて、3人で話をすることにした。相談係が、「今こんなことをしているのだね」と言うと、A子は、全く別の話に話題を変える。学校のことに触れたくないという回避の行動にも見受けられる。

38 X年10月9日

相談係が家庭訪問をしてA子と話をする。前回と同様、インコの話、犬の話、ぬいぐるみのテリーべーの話がでた。その後、風景画の受け取りをし、質問紙の実施協力（精神健康度調査、チェックリスト）を依頼する。

39 X年10月10日

早朝、祖父死亡の件を、地域の人より伝え聞く。次回からの訪問を、相談係は一時中断することにする。

40 X年10月11日～

家庭訪問した担任によれば、A子は祖父の死については特に混乱することはなく、平常の彼女のようであったという。むしろ関心が薄く、

目の前を通り過ぎる一つの出来事ととらえてい るようだともいう。祖父の死後、急に母親に甘え出す。べったりの時もある。祖父の看病につきっきりの母親に、十分応対してもらえなかっ た反動であろうか。

41 X年 10月 18日

担任が家庭科の実習（洗濯）に誘う。A子は 登校するような口ぶりであったというが、来られず。朝の起床が10時を過ぎてしまう。

42 X年 10月 19日

担任が陸上記録会に誘う。参加するような返事をしていたが、参加できず。事前に家で母親や担任と得意なボール投げの練習をしていた。ボールの使用にあたり、兄のボールを使うことに関して不安げであったという。

10月27日か10月30日に、父母との相談会を学校で行うことを予定する。

43 X年 10月 30日

父母面接の日である。校長、担任、相談係が 参加する。母親は、早期に無理にでも登校させた方がよかったと後悔していること、親戚の者に頼んで少々無理でも登校させてみたいと考えていること、兄の生活リズムが遅い方へずれてきたことを語る。

この母親の発言を受け、担任は、早期に登校を強制することに賛成しかねると言い、相談係は早くA子が登校できるようになればという願いは自然であり、学校側も同じ気持ちであることを断った上で、「風景構成法的手法で描いた絵画」を示しながら、今、A子には新しい芽が出ていていること、中学校への期待が内心あること、今はまだ家でエネルギーを補充していること、ここで急ぐと本人のペースを乱し、固く殻に閉じこもってしまうことを伝えた。

ここで相談係は、東山紘久著の「母親ノート法のすすめ」を紹介し、親子が“快”を感じることのできる会話が、心のふれあう親子関係に結びつくことを知らせる。そして、できれば夫婦で一読されるようにと本を渡した。次回、1月に会を持つことを確認し、会を終了する。

44 X年 11月 10日

社会科見学に参加する。

第4期 やや回復し、自分を見つめ始める時期

45 X年 11月 13日

相談係が家庭訪問をする。これまでの総括をして、この先の見通しについて漠然としているであろうA子の身の振り方について、カウンセリング的対応によってある程度明確化し、方向性を持たせたいという大まかなねらいを持って訪問する。これまで協力してくれた、質問紙・風景構成法的手法による絵画についての解釈を、「心の整理」という言葉をキーワードにして、すでに心の整理ができた部分があること、今整理の途中であるものもあること、そしてまだ整理できていない部分もみられることを伝える。

この訪問で、A子は自分を見つめはじめたが、親子の会話の中で話題が違う方に次々と移り、A子の内面に食い入ることができなかった。

46 X年 11月 14日

担任が家庭訪問をする。A子は、最近「落語」に興味を持ち始めている。印象的だったのは、A子は母親の言ったことに、きつい口調で応対するようになったことだという。担任は、「私がその場にいてそなから、ふだんの生活の中ではもっとだろう。」と述べた。

47 X年 11月 16日

A子の状態が表面上改善されないように見受けられることから、担任に不安が広がる。「6年生の終わりまで、ずっとこんなふうでは……。」とか、「こんなことをしていると、これから先もずっと自分の好きなことをして過ごすようにならないか。」などのつぶやきがそれである。

この件について相談係は、トゲトゲしいものの言い様をすることができるようになったのは、それだけ本人が自分の感情を両親に素直に表しても大丈夫だという気持ちが育ってきたと解釈できること、家で落語等に興味を示し夢中になっていることに関しては、何かに縛られてこれまで自分が本当にしたいと思っていてもできなかっただことが、心理的に解放され、今やできる状況になってきたと解釈できることを伝えた。

この後、専門家であるN先生に伺い、適切な対応ができるよう助言は仰がなければならないことを確認し、担任と相談係は、N先生に面会することを申し合わせた。

48 X年11月17日

相談係が午後、母親に電話をする。病院の予約のことについて相談係が訊ねると、毎日が忙しく、体も疲れて、おっくうになってしまふから、ついつい予約を入れそびれてしまったと言われる。相談係がそれを受容すると、「病院の先生と面接しても、毎回同じことを言われるのでは……」と母親は続ける。

そこで相談係は、病院の医師はA子のことをよく理解していること、いろいろな立場の人があのいろいろな角度から多面的にA子を理解することが大切であることを告げた。

後日、母親は病院に予約を入れる。

49 X年11月27日

担任が家庭訪問をするというので、相談係は訪問を取りやめる。

50 X年12月4日

午後、学校行事の観劇を催す。A子は途中から参加した。仲の良い友だちに手を引かれ、自分の席へ座った。さらに観劇終了後に、友だちに誘われて教室へ入り、帰りの会に参加する。その間、相談係は母親と話をする。ほどなくA子が来たので、次回父母相談会を12月11日に行うことを確認したのみとどまった。終了後母親の車で帰宅する。

51 X年12月6日

相談係が臨時に学級活動を行う。目的はクラスの子どものA子に対する認知の実態を明らかにし、A子の心のうちを知らせることにより、適切なA子像の認知に変容させることである。

相談係は、「エネルギー」という言葉をキーワードに、授業を展開した。授業の終わり際に「今日勉強したことを元に、Aちゃんに自分の思いを手紙で伝えよう」と、子どもたちに働きかけた。子ども達が書いた手紙の一部を以下に紹介する。

<男児 K. S. >

おーい、大丈夫ですか。前、久しぶりにAさんに会いました。でも、Aさん、そんな無理をしなくてもいいです。もう寒い季節に変わりました。ぼくはわかっている、Aさんの気持ち。Aさんのがんばる気持ち、ぼくは応援するよ。早くなおるおまじないがほしいね。ぼくもほしいと思っているんだ。心配しなくともいい。みんなもおうえんしているんだ。がんばって、だれにもまけない力がつくと、ぼくもうれしいです。ぼく、初めて会うとき、Aちゃんてどんな子かなぁーと思ったんです。がんばれ。いつまでも元気でいて下さいね。バイバイ。本当はぼく、Aちゃんとあそびたかったんだよ。元気ですね。

<女児 M. F. >

はじめのうちは、何で楽しいことがあるときだけ来て、それから来なくなつて。という気持ちになっていました。今日、先生の話を聞いて見直しました。今度は、友だちになれるかもしれないね。早く学校においでね。がんばってね。

52 X年12月7日

母親が病院へ行く。A子も行く予定だったが、次回にするといって行かなかった。担任と相談係がT病院へN医師と面会する。N医師の見解は、「家族のバランスが変わってきた。母親は、ほっとされており、A子に目を向けられるようになってきたから、これから先、期待が持てそう。A子が学校へ行けないのは、家庭が不安定なため。家庭が安定していくれば、A子は社会(学校)に出られるようになる。母子間、父子間の関係がよくなり、家庭がほっとできる場になっていけばよくなっていくと思われる。」その後、医師は担任が質問したことについて次のように回答される。

「A子は、今はテレビを見てばかりいるということだが、テレビを見るということは、それなりに社会に目を向けていることの証拠である。母親に反発したり、父親を毛嫌いしたりすることは、両親を信頼している証拠もある。反発したりしても、それを両親が受けとめてくれることがわかっているからする。信頼関係が育つ

てきている。昼夜の逆転は、子どもの情緒不安のバロメーターである。情緒が安定してくれれば自然にもとに戻る。朝、1回は起こしてみるのはよい。」

53 X年12月11日

父母相談会を行う。母親は、医師に「母親が落ちついてきたから子どもが落ちついてきた」と言わされたことを報告する。最近夢中になっていることは、漫才のテレビ番組や歌番組を見る事。漫才は台詞を覚えてしまうほど繰り返し見て、家族を驚かせる。また、漫才のおもしろい場面で大笑いをするという。歌番組を見れば歌詞を覚えてしまい、大きな声で歌うようになったという。母親は、A子と一緒にになって漫才を見、同じように楽しむそうである。これは、母親がA子と同じ目の高さで接することができるようになっていることを示すことと捉えた。この母親の変容に、相談係は賞賛の言葉を贈った。

相談係が漫才にこだわって母親に訊ねると、A子が大阪に漫才を見に行きたがっていることがわかる。相談係は「本当にやってみては」と勧めた。それは、A子が実際に漫才を見に行くためには、いろいろな段取りをする必要に迫られるが、A子が乗り気であるだけに自分で解決していくことをいとわないであろうからである。相談係は、これもA子の自立心を育てる一つの活動だと考えた。

ここでのまとめは、母親が自然にA子を受け入れることができるように変わられたことで、A子がぐっと変わってきたことについた。相談係も、その点を強調して伝えるとともに、母親に感謝した。

続いて学校側の対応に話題を移した。学校側は、A子が登校したとき、温かい雰囲気で迎えられるよう環境調整をしたり、またA子に対する正しい見方ができるよう指導したりしていることを伝える。このことに関し、相談係は先日の学級活動（12月6日）を契機に、クラスの子のA子に対する認知が変わってきたことを例に出す。12月8日にA子が「お母さん、2学期っていつまで？3学期から行こうかな。」と

自分から言い出したのは、A子のクラスの子に対する認知が変容し始めたことをうかがわせると考える。

昼夜逆転の生活は改善されつつあるとはいえる。起床は9時から12時の間で、まだ不安定である。情緒不安のバロメーターが起床の時刻であるとする医師の見解からすれば、まだまだ登校できるときではないかもしれないが、これから冬休みを迎える、その間の生活がA子にとって充実したものとなれば、3学期に登校することも夢物語ではないような気がする。焦ってはいけないが、可能性はあくまでも0でないことを念頭に置き、できるだけの支援を続けたい。

これから冬休み終了までの、学校や家庭の対応が鍵となるような気がした。

54 X年12月19日

相談係が家庭訪問をする。相談係がカウンセリング的手法で彼女の気持ちに共感・明確化・要約・切り返しを行うと、今の自分の心境について多くを語ってくれる。この頃服装や身だしなみの好みが変わってきて、お母さんが買ってくれたものは子どもじみて嫌なこと、そして自分は不良っぽくなってきたこと、しかしそれはなぐさめであるとも語る。また、秋口から興味を持ち始めた漫才にあこがれ、漫才師になりたくて、たとえ一人でも中学を卒業したら絶対大阪に行きたいとも言う。クラスの友だちに対しては、学校へ行くと妙に歓迎されるのが嫌であるという印象を持ち、学校の先生では養護教諭が一番好感が持て、保健室は安心できるところだと語る。ここで、A子が持つこれから先の見通しについて「卒業」「中学」「その後」をキーワードにして尋ねると、卒業式には言ってみようかと思っていること、3学期から始まるスケートの授業には参加してみたいこと、中学は、行かねばならないと思っていること、中学卒業後は漫才師をめざしてみたいことを語った。

終始母親と同等に、あるいは対抗するような態度で語り、以前には見られなかった教師にも物怖じしない姿勢が感じられた。また、上記のような母親から独立しようという言動がこれまで

でなく顕著で、また一つ殻を破り、自分さがしのヒントを得たような印象を持った。相談係は、今の自分でいいだろうかと迷うような物言いをするA子に、「今あなたは新しい自分を見つけつつある。どんどん好きなことをしたらい。」と助言した。まだ学校のことについては回避的なところが見られるが、以前の神経質なA子から脱皮し、自分を確かに見つめ始めた姿には、たくましささえ感じた。

IV 考 察

初期には、早期に学校が対応を始めることが功を奏するのではないかと思われた事例であった。しかし、欠席が続き始めてからでは遅すぎることもあることをこの事例は語っている。

当初、1日目の欠席で「もしかしたら……」と登校拒否の可能性を考え、次の日には学級環境の見直しを図る手立てを講じ、そして教育相談委員会も早期に開き、状態像を踏まえて対応の指針を出した。これまでの、教育相談の成果といえるが、それでA子が登校を果たせるほど甘くはなかった。1年生からのA子の学校生活の状況を振り返ると、2年生で登校をしぶったことがあります、3年生で保健室に頻繁に入り出している。この時は、養護教諭と私と連携しながら対応し、本人を受けとめ、安定の方向に導くことができたと思っていた。4年生の担任にもこのことはよく話し、目を向けてくれるよう4月当初から依頼していた。そのせいもあっただろうが、この1年間は非常に安定し、特に身体症状もなく悩みを訴えることもなく過ぎていった。この調子なら大丈夫だろうと、学校側は安心してしまったのである。そして、5年生。家で時々登校前に体の不調を訴えていることを学校は全く知らずにいた。だから、1月からの長期欠席に驚いたのであるが、これまでの流れを見れば全く突然ではなかったのである。不登校になることを確信を持って予測できなくても、学校に適応しにくいA子の状況が続いていたと考えれば、その延長線上に今回の登校拒否があ

ると考えられるからである。彼女はサインを出していたのである。したがって、連続して欠席を始めたときには、もうすでに彼女の葛藤はかなり深いレベルまで到達し、心の糸はもつれにもつれていたと推測できる。早期対応は大切であるが、やはり遅くとも登校しながらも不適応感を抱いている潜在的登校拒否状態のときに適切な対応をしていくことの必要性が痛感された。

今後の対応としては、学級の子のA子に対する認知が変容を始めていることから、次はA子のクラスの子に対する認知を変えていくことがある。また、他の学年の子どもたちにA子の状況を正しく認識してもらうような指導が必要となろう。次に、母親にA子をさらに深く理解してもらうために、母親に聞き上手になってもらうように、東山紘久氏の提唱する「母親ノート法」を本校の現実に即して実施することである。これによって、S会話からT会話への転換が図れるよう支援する。父母相談会はこれまでのペースで持つようにするが、A子の理解が一層深まるよう、また夫婦の相互理解が一層深まるよう展開の仕方を工夫したい。医師の見通しは、今後家庭内のバランスが変容する要因があることから、今しばらくは不登校の状態が続くが、A子が前向きに動き出す可能性があるということであった。学校は学校なりにこの示唆を受けとめて、上述のような対応が必要になると考える。

本事例は、第1執筆者の斎木が、かつて勤務したことのある小学校で担当した事例である。長丁場となり、くじけかける時もあったが、何とか実践を続けてきた。今後も家族や教師がA子に沿って対応し、まわりの関係を良くする中で彼女が自立することを待ちたい。いつか彼女が旅立つ日が来ることを願って。

引用文献

- 岐阜県教育センター協会編 玉井収介監修
1980 学校における登校拒否の教育相談
教育出版
- 月刊生徒指導編集部編 1989
クラス担任の登校拒否入門 学事出版
- 函館市南北海道教育センター 1984
サインを見つけて
函館市南北海道教育センター研究紀要
第145号
- 函館市南北海道教育センター 1992
ラポールを深めて
函館市南北海道教育センター研究紀要
第154号
- 東山紘久 1984
母親と教師がなおす登校拒否 創元社
- 星野仁彦・熊代永 1990
登校拒否児の治療と教育 日本文化科学社
- 石川憲彦・内田良子・山下英三郎編 1993
子どもたちが語る登校拒否—402人のメッセージー
世織書房
- 石川義博・青木四郎 1986
思春期危機と家族 岩崎学術出版
- 石田和男 1990
登校拒否をのりこえる 青木出版
- 稻村博 1994
不登校の研究 新曜社
- 稻村博・今井五郎・小泉英二・神保信一・高橋哲夫・中西信男編 1990
登校拒否のすべて 第一法規
- 神保信一 1984
登校拒否児の理解と指導 日本文化科学社
- 金子保 1992

- 担任と親でなおす登校拒否 田研出版
小泉英二 1973
登校拒否－その心理と治療－ 学事出版
- 小泉英二 1975
統・登校拒否－治療の再検討－
学事出版
- 国分康孝・米村正信 1976
学校カウンセリング 誠信書房
- 村田保太郎 1988
子どもの心の健康相談室 平凡社
- 文部省 1983
文部省生徒指導資料第18集
文部省印刷局
- 文部省 1991
文部省小学校生徒指導資料 7
文部省印刷局
- 中井幹 1992
学校における登校拒否児への対応
岐阜大学治療教育研究紀要, 13, 1-24
- 中井幹 1994
教師の受容と共感 岐阜大学教育学部障害児教育実践センター年報, 1, 165-175
- 鈴木康久・田中幸治・駒木昭仁・綿引一男・増田久美子 1984
ぼくたちの朝 教育資料出版会
- 高階玲治編 1995
登校拒否－教師は何をするか－ 明治図書
- 登校拒否を考える会編 1987
学校に行かない子どもたち
教育資料出版会
- 氏原寛・谷口正己・東山弘子 1991
学校カウンセリング ミネルヴァ書房
- 渡辺位 1992
自然に学ぶ子育て 教育資料出版会